

評価項目 1	（ア）体系的な履修を促す科目編成となっているか （イ）開講科目数は履修登録者数、専任教員の担当状況から見て適切か
参照資料	・開講科目・講義数の状況（科目区分別・3カ年程度） ・単位修得要領（カリキュラムマップ） ・カリキュラムマップ集計データ（アセスメントブック） ・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3カ年） ・その他参照した資料（科目群別非常勤比率（3カ年程度））

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）現代社会学科では、「教育課程編成・実施の方針」に基づき、「現代社会専攻」「国際社会専攻」「情報システム専攻」の各専攻を設置し、体系的な履修を促す科目編成がなされている。自然科学から人文・社会科学までの幅広い分野について、現代社会を理解するために必要な学際的な視野を身につけ、同時に各自が選択し専門とする分野における学問成果の高度な修得を可能にする教育課程を実施している。開講科目・講義数の状況から科目編成を確認すると、2019 年度から 2021 年度にかけて科目数や講義数にわずかな変動（増減）がみられるが、学生に多様な科目を提供し、その幅広い選択を保障する学科の役割から判断すれば適切かつ妥当なものといえる。現在、学科では改組に向けて、様々な視点から科目編成を検討しているところである。

（イ）現代社会学科専門科目について、科目群別非常勤比率（3カ年程度）を確認すると、約 70%の割合で専任教員が担当しており、他学科とほぼ同水準にあるといえる。その一方で、開講科目・講義数の状況によると、平均受講者数（3カ年程度）は科目数・クラス数とも 70 名近くに達している（2021 年度は 71.3 名）。その数は他学科と比べて最も多く、その差も顕著である。学科が重視する教員によるフィードバックや学生同士の討論などがしやすい受講者数には程遠く、開講科目数は適切とは言えない。

【成果が上がっている点】

（ア）「様々な学問分野を最初は幅広く学び、その後は深く学んでいく」（入試広報）のが現代社会学科の学問・学びの特性である。学生の履修に関連する満足度や学生の成長実感の結果からは、学科のカリキュラム特性を活かした「広い教養」での満足度が高く、学科のセールスポイントがうまく学生の実感として結実しているといえる。たとえば「カリキュラムの選択の幅が広い」という項目での満足度（76.5%）は全体平均を 21.5 ポイントと大きく上回り、学内最高である。「幅広い知識・教養が身につけられる授業が多い」という項目でも高い数値（75.9%）が示されている（卒業時アンケート）。「授業の多様性」という項目では満足度が 2 年間に大幅に上昇しており、ディプロマ・ポリシーがカリキュラムに反映されている証左といえる。また、学科が重点を置いている能力（知識・理解、汎用的技能、思考・判断）が身につけていることも伺える（ALCS 学修行動比較調査）。

（イ）卒業時アンケートによると、「少人数・ゼミ形式の授業が充実している」（75.7%）、「討論・参加形式の授業が受けられる」（51.7%）の項目ではいずれも全体平均を上回る満足度が示されており、学生の一定の満足度と成長実感を確認することができる。

【課題となっている点】

（ア）体系的な履修を促す科目編成となっており、その一定の成果も確認できたが、ALCS 学修行動比較調査からは、それが学生には必ずしも十分に浸透していないことも見て取れる。「大半の授業の質」（1 回生 80.2%、3 回生 89.0%）、「総合的にみた大学での学び」（1 回生 84.3%、3 回生 88.0%）の項目では 2 年間に満足度が大きく上昇しているが、いずれも 1 回生での満足度は全体平均（それぞれ 86.5%、88.1%）を下回っており、全体平均との関係で上回生になるにつれての改善の度合いが顕著である。既述のとおり「授業の多様性」という項目でも満足度は 2 年間に大幅に高まっている。これは裏返せば、1 回生の時点では学科の学問・学びの特性やカリキュラムが学生にうまく理解されていない可能性があることを示すものともいえる。改組にともなう新カリキュラムの実施にあたり、早い段階で学科の学問・学びの特性に対する学生の理解を促せるような対応を検討したいと考えている。

また、ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの関連では、ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの対応にアンバランスな部分がみられる（単位修得要領、カリキュラムマップ集計データ）。現代社会学科専門科目とディプロマ・ポリシーとの関連性がカリキュラムマップに必ずしも適切に、あるいは十分に明示されていない可能性がある。単位履修要項に記載されているカリキュラムマップの内容を検証し、その適正化・実質化に向けた取り組みが必要となる。

（イ）ALCS 学修行動比較調査によると、「大半の授業に関して、その履修人数」の項目では満足度（1 回生 80.9%、3 回生 76.7%）が全体平均（1 回生 85.5%、3 回生 88.2%）を大きく下回っている（3 回生時の「不満」との回答（23.3%）は全体平均（11.8%）の倍以上の割合）。卒業時アンケートでも同様の状況が確認でき、「授業（講義、授業、ゼミ等全部含めて）で他人と協力して物事を進める機会が多い」（58.6%）、「各授業（講義、授業、ゼミ等全部含めて）の人数が適切である」（65.2%）、「教授、先生と生徒の距離が近い」（62.0%）といった項目で満足度は全体平均（それぞれ 61.1%、66.7%、66.7%）を下回っている。これらの課題は総合的な視点からの検討が必要となるが、ST 比の問題が一因ではないかと考えられる。

評価項目 2	各種アンケート結果等から見る、教育上で「成果があがっている点」・「課題となっている点」についての検証（※アセスメントブック検証結果から流用）
参照資料	・卒業時アンケート（経年比較） ・ALCS 学修行動比較調査（他大学比較・3 カ年） ・ジェネリックスキル測定テスト結果（1→3 回生の伸長・3 カ年） ・アセスメントブック ・授業アンケート結果（学位プログラムレベル・3 カ年） ・大学院アンケート

担当部局

現代社会学科

・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

現代社会学科では、様々な学問分野を最初は幅広く学び、その後は深く学んでいくことを学科の学問・学びの特性としている。アセスメントブック（ALCS 学修行動比較調査、PROG テスト、卒業時アンケート）の結果には、そうした特性が反映されるとともに、知識・理解、汎用性技能、思考・判断といったディプロマ・ポリシーの各項目において学生の高い修得度が示されている。ディプロマ・ポリシーとカリキュラムの整合性、カリキュラムの適切さや妥当性を裏付けるものであると考えられる。

卒業時アンケートでは、「専門的な知識が身につく授業が多い」、「将来の職業に役立つ知識・技能を身につけられる授業が多い」という項目での満足度は、大学全体と比較してそれぞれ 4.0 ポイント、9.7 ポイント低い。しかし、ALCS 学修行動比較調査では「専門分野について、高度の知識・理解・技能を有している」の項目で修得度の高さ（全体平均を 0.3 ポイント上回る）が示されている。これも学科の学問・学びの特性と矛盾する結果ではない。

一方で、アセスメントブック（PROG テスト、ALCS 学修行動比較調査）では、社会性・自律性（「組織の中で、自らの専門的知識・理解・技能、個性や能力を活かして協働できる」、「適切なリーダーシップを発揮できる」）や自立性（「卒業後も障害を通じて学び続けられるよう、自律的な学習能力を身につけている」）といった項目で修得度が低い（大学全体と比較して 0.3 ポイント以上下回る）結果となっている。この点は課題であり、まずは学科として課題認識を共有することが必要であるとする。ディプロマ・ポリシーとカリキュラムのアンバランスが一因と言えるかもしれないし、ST 比の問題に起因する部分も少なくないと思われる。

【成果が上がっている点】

アセスメントブック（ALCS 学修行動比較調査「経験」と基礎力能力伸長との相関分析）によると、「授業内容に刺激されて自主的にあらたな勉強や探求をしたこと」、「自発的に文献や資料を調べる」という項目で比較的高い相関がみられ、総合的なコンピテンシーの伸長がもたらされている。前者が後者につながったと考えられ、カリキュラムの効果が検証されたと受け止めている。また「授業内での学生間のディスカッション」、「授業中に質問して、よかったと思えた経験」、「提出物に対する教員からの添削やコメント」などの項目で学生の対人基礎力、対課題基礎力の向上との相関も確認できる。このことから学生の能力伸長への学科教員の授業運営や学生対応の貢献が見て取れる。

【課題となっている点】

学生の修得度が低い項目（ALCS 学修行動比較調査）が社会性・自律性、自立性にほぼ集中しており、大学全体と比較して 0.3 ポイント以上下回っている。学科での感覚と大きなズレがある結果といえるが、これは DP とカリキュラムの整合性のなさを反映したものかもしれない。たとえば、現状では演習科目が自主性と結び付けられていない。学科専門科目とディプロマ・ポリシーの 6 つの柱との関連性を再検討し、それをカリキュラムマップに反映させることが求められよう。

前述のとおり、「授業の多様性」という項目では満足度が 2 年間に大幅に高まっており、「大半の授業の質」、「総合的にみた大学での学び」という項目では全体平均との関係でも満足度が大幅に向上してい

る（ALCS 学修行動比較調査）。いずれも 1 回生時には学科の学問・学びの特性が学生にうまく認識されていない可能性を示唆するものといえる。こうした課題については、来年度の改組に向けてディプロマ・ポリシーとカリキュラムの関係を検証するとともに、今年度中に学科内 FD を企画し、改善に向けた方策を検討する。

評価項目 3	(ア) 成績評価、フィードバックは、シラバスに基づき、適切に実施されているか。 (イ) 成績分布に偏りは生じていないか。
参照資料	・成績分布（G P A ・得点）（科目群別・3 カ年） ・ALCS 学修行動比較調査（対象設問） ・その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) シラバスの「評価方法」欄は、「評価項目」、「配分（％）」、「評価の観点」の小項目によって評価基準を示し、明確な成績評価を心掛けている。平均得点をみたところ、2019 年度 77.36 点、2020 年度 81.40 点、2021 年度 78.60 点と全体平均とほぼ近似している。提出された学生の成績は、教務課によって確認・点検され、適切な単位認定が行われている。

ALCS 学修行動比較調査から、成績評価に対する学生の印象をみたところ、現社専攻については「科目によりばらつきがある」が 2020 年度には 32.5%と最も多かったが、2021 年度には 24.6%と減少し、変わって「適正に評価されている」が 28.2%から 34.8%と最も多くなっている。国際社会専攻については、2020 年度は「分からない」17.5%、「自己評価より評価が低い」15.0%との回答が多く、「適正に評価されている」17.5%の低さが目立ったが、2021 年度には「分からない」9.1%、「自己評価より評価が低い」4.5%と減少し、「適正に評価されている」25.0%が増加している。情報システム専攻については、2020 年度は「自己評価より評価が高い」30.8%の高さが目立ったが、2021 年度には「適正に評価されている」が 32.7%と最も多くなっている。以上より、2020 年度についてはコロナ禍における授業運営の様々なイレギュラー対応のなかで、成績評価に対する学生の印象は専攻により多少の齟齬があったことが推察されるが、2021 年度にはコロナ禍の授業運営も 2 年目となり、学生の自己評価との齟齬がある程度解消されてきていることがみてとれる。

授業アンケート結果より、フィードバックに関する学生の評価をみたところ、「課題に対するフィードバックは効果的に行われていた」に対して「非常にそう思う」「そう思う」の割合は、2020 年度前期 67%、2020 年度後期 76%、2021 年度前期 74%、2021 年度後期 75%と高い評価を得ており、適切なフィードバックが行われていることが分かる。

(イ) 本学科の成績分布をみたところ、2019 年度（S：19.2%、A：32.2%、B：22.0%、C：14.7%）、2020 年度（S：33.3%、A：31.3%、B：16.2%）、2021 年度（S：30.4%、A：31.5%、B：15.0%）となっており、極端なバランスの悪さはみられない。2020 年度、2021 年度の成績分布がやや S、A 評価に偏りがちであったのは、コロナ禍による授業方法の変更や欠席者への配慮などのイレギュラーな対応が

担当部局

現代社会学科

影響しているものと考えられる。

【成果が上がっている点】

（ア）特記事項なし

（イ）特記事項なし

【課題となっている点】

（ア）特記事項なし

（イ）特記事項なし

評価項目 4	（ア） カリキュラム上主要な科目には専任教員を配置しているか。 （イ） 非常勤比率の高いカリキュラムとなっていないか。
参照資料	・ 授業担当一覧 ・ 科目群別非常勤比率（3 カ年程度） ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

（ア）カリキュラム上主要な科目と考えられる必修科目における専任教員担当割合をみると、2017 年度 96.7%、2021 年度は 92.5%となっており、適切に専任教員が配置されていると考えられる。

（イ）本学科の非常勤比率は 2017 年度 27.1%、2018 年度 26.8%、2019 年度 24.1%、2020 年度 28.2%、2021 年度 31.5%と漸増しているものの、約 3 割にとどまっている。また、（ア）でもみたように、2021 年度の必修科目に限定すると非常勤教員の比率は 7.53%と 1 割未満にとどまっており、非常勤比率として特に問題はないと考えられる。

【成果が上がっている点】

（ア）特記事項なし

（イ）特記事項なし

【課題となっている点】

（ア）特記事項なし

（イ）特記事項なし

担当部局

現代社会学科

評価項目 5	学科・専攻等個別の FD 活動について、どのような内容・目的で実施しているか。
参照資料	・ FD の取り組み状況 ・ 前年度点検シート ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

現代社会学科では、2019 年度に学科独自の FD 活動として「基礎演習Ⅰ」で使用する学科共通テキストを作成し、2020 年度から当該テキストを用いて各教員が授業を実施している。そこで、2021 年度は学科独自の FD 活動として、当該テキストの活用方法について教員間で意見交換を行った（教員 21 名出席）。

その結果、他の教員が当該テキストをどのように活用しているかを知ることができただけでなく、「基礎演習Ⅰ」でどのような学びを提供しているかについて情報交換を行うことができ、学科としての教育の質の向上に大きく貢献したと考えられる。

【成果が上がっている点】

現代社会学科では教員の専門が非常に多岐にわたるが、教員が協力して作成した共通テキストを「基礎演習Ⅰ」で用いることにより、互いの専門や研究を認識しつつ関連性を持たせた学科教育の実現に役立っていると考えられる。

【課題となっている点】

2023 年度からは新カリキュラムが開始されることから、それに備えて「基礎演習Ⅰ」共通テキストの位置づけやその内容を検証することが求められよう。

評価項目 6	(ア) 職位、年齢、性別のバランスに配慮した教員組織編成をおこなっているか。 (イ) カリキュラムに基づく教員組織となっているか
参照資料	・ 教員組織編制方針 ・ 専任教員の状況 ・ その他参照した資料（ ）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

(ア) 現代社会学科の 2021 年度における教員数は 27 人である。年齢構成は 60 代以上 6 人 (22.2%)、50 代 11 人 (40.7%)、40 代 7 人 (25.9%)、30 代 3 人 (11.1%)、平均年齢は 51.67 歳であり、年齢的には中堅層が分厚い優れたバランスになっている。職位構成は教授 17 人 (63.0%)、准教授 7 人 (25.9%)、

担当部局

現代社会学科

助教 3 人（11.1%）となっており、やや偏りがみられる。今後は分厚い中堅層が年齢を重ねていくこともあり、計画的に准教授・講師の職位の若手教員の採用をすすめていくべきである。また性別に関しては、女性 10 人（37.0%）に対して男性 17 人（63.0%）と男性の比率が高いが、2022 年度には女性 12 人（44.4%）、男性 15 人（55.6%）と改善されている。

（イ）現代社会学科のカリキュラム・ポリシーを踏まえ、人間・環境、心理・文化、家族・地域社会、政治・公共政策、経済・ビジネス、情報、国際社会の各分野の教育課程・開講科目に対して、各分野を専門とする教員を配置しており、担当科目と各研究分野が整合する、カリキュラムに基づいた教員組織となっている。

【成果が上がっている点】

- （ア）特記事項なし
- （イ）特記事項なし

【課題となっている点】

- （ア）特記事項なし
- （イ）特記事項なし

評価項目 7	教育活動予算において実施している活動は、その目的に対してどのような成果をあげているか。
参照資料	・教育活動予算の執行状況 ・その他参照した資料（令和 3 年度 教育活動予算使用計画書、卒業時アンケート、ALCS 学修行動比較調査〔アセスメントブック〕）

《各部局による点検・評価》

【検証結果（全体概要）】

現代社会学科での教育活動予算の活用状況は、予算額 5,900,000 円に対して執行額 3,114,395 円（執行率 53%）となっている。2021 年度の教育活動予算は、「基礎演習 I」で使用する学科共通テキストの印刷・製本、学科の各専攻の教育プログラム充実化のための環境整備・運営経費（現代社会専攻では社会調査プログラムの推進とそのため情報機器備品の整備、国際社会専攻では海外留学へのインセンティブを与えるための補助、情報システム専攻では Ruby 技術者認定支援と高度なプログラミングスキルの定着を目指した授業システム「カメレオン」の導入）に予算を重点的に活用した。

【成果が上がっている点】

社会調査プログラムのソーシャル・リサーチ、フィールド・ワークでは、当初のアクティブ・ラーニング型の教育効果だけでなく、資料収集や分析など今後の教育実践で必要とされる IT 能力の向上に効果が認められた。海外留学へのインセンティブを与えるための補助では、補助対象となるスコアを調整

し、スコアが上がるごとに補助を増額し、複数回受験を促す制度変更を実施した結果、受験者が増加した。特に 1 回生へのインセンティブ効果が顕著であった。また、Ruby 技術者認定支援により、Web サイトでの広報活動などを通じて本学が Ruby アソシエーションの認定教育機関であることを学内外に周知できている。

卒業時アンケートによると、「地域のヒトや実際の社会と連携する授業やインターンシップが多い」という項目での満足度（42.4%）は学内で最も高く、「語学力が向上する授業・制度が充実している」という項目での満足度（34.3%）も全体平均を上回っている。ALCS 学修行動比較調査からは、「情報通信技術（ICT）を活用することができる」（ディプロマ・ポリシーの汎用的技能）という項目で修得度が高いことがわかる。こうしたデータからも予算充当の効果が伺える。

【課題となっている点】

特記事項なし

実施責任者からの具体的な向上・改善施策（案）

具体的な向上・改善施策（案）について

各評価項目について、エビデンスに基づく丁寧な自己点検がなされている。点検内容に対する自己評価も、妥当なものとなっている。特に「1 回生の時点では学科の学問・学びの特性やカリキュラムが学生にうまく理解されていない可能性がある」（評価項目 1）との指摘は重要である。学生の理解を促す方策の策定および早期の実施をお願いしたい。

向上・改善施策を考えるうえで必要になると思われるのは、以下の 2 点である。第 1 に、評価項目 1・2 の説明で使用されている 4 点（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・マップ、学科専門科目、カリキュラム）の関係を、より明確化することである。「関連性」、「整合性」、「アンバランス」といった言葉で表現されている問題点をより具体的にイメージできないと、問題点の明確化も対応策の考案も難しくなりそうである。上述の「1 回生の時点」での問題にも関わる重要課題の指摘でもあるので、上記 4 点の関係がはらんでいる問題点の明確な言語化をまずお願いしたい。

第 2 に、評価項目 1・2 で直接の言及がある S T 比について、それを改善する試みが可能かどうかを考えていただきたい。「社会性・自律性」「自立性」に関する数値の低さが S T 比の悪さに起因するものであるならば、「社会性・自律性」「自立性」の向上を実現するには S T 比の改善が必要になるように思われるからである。むろん、本学科による取り組みだけで S T 比の大幅な改善を実現すること不可能である。その意味でこの点については、若干の工夫を施す余地があるのかどうかを議論することから始めるのが良いのではないだろうか。